

# 船舶兵

## 歩兵から船舶兵へ転属

愛媛県 林 英人

私は大正十二（一九二三）年五月十二日、愛媛県温泉郡川上村大字南方で林家の長男として誕生しました。

男子四人、女子二人の六人兄妹でしたが現在は男子四人になりました。林家は昔から呉服商として百二十年の歴史を有する名家、豪商だったようです。

私の徴兵検査は昭和十八（一九四三）年十二月一日でした。第一乙種合格、歩兵となり、昭和十九年二月一日現役の歩兵として徳島の歩兵第一四

三連隊補充隊第四中隊に入隊しました。

二月十日、歩兵第四十二連隊に転属、満州に向かうことになり二月十四日、鮮満国境通過、と共に満州第七一二部隊に転属となりました。

二月十六日、虎林に到着、直ちに第二中隊に編入となり戦時防衛勤務に従事となりました。いわゆる国境警備隊の一員となったのでした。

古兵はすべて四国出身者でしたので、いわゆる初年兵いじめはありませんでしたので大変助かりました。

兵舎は木造で極めて広大な敷地に二〇〇メートルの間隔で建てられてあり、初年兵の仕事である飯上げには、遠くの炊事場までの往復が大変でした。

冬季の気温は零下四〇度にもなりますので、炊事場から蒸し立てのサツマ芋が兵舎に到着するまでに、アイスクリーム状に凍る程の寒さでした。夏でも地下一メートル掘るとツンドラ状態で凍結していました。鼻毛、鼻ヒゲは忽ち凍ってしまいます。

内務班のなかは四国出身の兵隊ばかりなものですから、日本陸軍の伝統でもある「ビンタ」は全くありませんでしたので非常に助かりました。

話が前後しますが、釜山から虎林までの列車輸送中、便所の中に鉄棒があり、用便後必ず棒で便器に付着した便を突き落とすよう厳命がありました。もし怠ると直ちに凍結してしまいますので、糞便が衣服に付着して跡始末に困った想い出があります。

虎林に到着、兵舎に入るとすぐに「使役がある。希望者は手を挙げる」とあり、私はすぐ申し出ました。人数は十人で指揮者は鬼軍曹と悪名高い（後

になってわかった）軍曹で徹夜で砲弾運びをやらされました。

一発ずつ箱に入った重さ三〇キロの砲弾を、一〇〇〇発以上を、五〇〇メートルの距離（弾薬庫から貨車まで）を夜通し貨車積みをやらされ、フラフラになり「御苦労」の一言で使役が終わりました。

さすがの鬼軍曹も徹夜の重労働に翌日一日を「休養せよ」と与えてくれました。

この重労働に参加したことが私が幹部候補生を志願した事に加えて好印象を幹部将校に与えたいしい事を後で知らされました。

この砲弾は後で聞いた話によると、関東軍第五軍司令官だった山本奉文閣下が、フィリピン方面軍司令官になって南方に転任された時期と符合するところから南方戦線に使用する砲弾だったそうです。

私の入隊した虎林は朝鮮の反日将軍である金日成の勢力拠点に近い為か討伐が忙しく、初年兵の

一期検閲は無しで、六月十日に上等兵となり、併せて昭和十九年度第二次幹部候補生となりました。討伐参加が実地教育になったのでしよう。

将校の卵ですから、きびしい訓練が続きました。教育担当は陸士出身の大場少尉でした。ある夜、候補生五人が勉強中に少尉が入ってきて「蚊取線香をつけてやる」といって催涙ガスを焚いた。五人は慌てて携帯していた防毒面を着けたら、少尉が「操典によれば装面は上級者の命令があつて行わねばならぬ。お前達は違反したので罰として一昼夜装面せよ。別命あるまで脱面は許さぬ」と食事抜きでやらされ、腹は減るが装面のままでは食事もできず、本当に苦しかったです。

ガス教育の一環として、ガス室で色々なガスの実体験をするのですが、例の大場少尉が装面ナシでガス室に入り我々に手本を示すつもりでしたが、入って三十秒もたたぬうちに咳き込んで鼻と口を手を当てて飛び出し、その場に倒れ込んで苦しんでいました。

生徒の前に醜態をさらす始末にあきれた教官は、我々に合わす顔もなく、間もなく転属になったのか姿を消しました。

虎林から北方の虎頭まで行軍（夜間）して演習をすると、「ソ連」側は照明弾を上げて我々の演習を監視していました。

日本側もソ連の夜間演習の時は同様に照明弾を上げて監視していました。国境を挟んで、お互いに敵情を探っていました。終戦まで一年位前ですね。

昭和十九年六月、牡丹江の第五軍司令官（山下大将）が南方に転出時、幹部候補生を除く部隊全員が南方に転属しました。同年兵の全部が南方で戦死したようです。

七月十日、兵長に昇進、甲種幹部候補生を拝命する。そこで転属命令が下り『戦車か、落下傘か、船舶か、三つの中から一つ選べ』と言われ、四国の船舶を選びました。八月十日でした。九月五日、

列車で虎林を出発。九月九日、下関に上陸。香川県豊浜に到着しました。

昭和十九年九月十日、「陸密第二七六号」で船舶司令部に転属、集合教育のため船舶司令部候補生隊に転属（隊長・大佐村中四郎でアツツ島で玉碎、樽見中佐が後任）しました。六分儀学教育の間、セブ島からの転属候補生が疥癬を伝染したので、一カ月間、硫黄の浴場に入れられました。

その後、宇高連絡船で操舵訓練を高松の寺で実施中、父が死んだ電報が入り帰郷したが葬式に間に合わず納骨だけ済ませました。

昭和十九年九月十日、伍長に任官。十二月十日軍曹に、昭和二十年四月二十九日曹長に進級、卒業同日、見習士官、将校勤務任命、海上駆逐隊に転属、教育隊に編入（下関）、同日、中隊規模の兵を連れて出発、光に一泊の折、米機の空襲を受けました。

我々の教育では焼夷弾は地上に落下してから着

火するものと教えられていましたが、米機の場合は火の付いた焼夷弾が空から降ってくる感じで、近くの農家のワラ屋根が燃え出したら家の中から女性一人が枕を抱いて飛び出してきました。翌日、下関に入り高等女学校を接収して駐屯しました。

教育隊の本隊はハルマヘラ島にありましたが、終戦まで、この女学校にありました。避難訓練は高さ一〇メートルから立ち降りすると二、三メートルもぐりません（被服着用のうえ）。

下関には御存知のように下関要塞がありました。毎晩夜十時過ぎになるとB 29が編隊で「豊後水道北上中」と空襲にやってきました。ここで一つ感じましたことは要塞の真上にくると必ず撃墜されてしまったね。落ちたB 29に向かって九州の女性が竹槍を持って「仇を取ってやるんだ」と駈けていきました。銃後の女性の闘志に感心しました。下関要塞に何か秘密兵器でもあったのか知りませんが不思議でした。

八月一日、海上駆逐隊教育隊付になり少尉に任官、同時に予備役編入となりました。八月七日頃、下士官クラスが十人転属してきました。「教官殿、広島でピカッと光ったので、後を向いたら何にも無くなっていましたよ」というのを聞いていた東大出の仲間が「原子爆弾だ!」と叫んで、毛布にくるまって、室の片隅にうずくまりガタガタ震えていました。

昭和二十年八月十五日、終戦を告げる玉音を拝したが、同級生の四、五人しか上官がおらず、どうしたものかと思案に暮れました。

八月十八日、復員命令が来ました。

東北出身の兵隊は所帯持ちが多いので一日も早く帰りたく「帰してもらわないかん。チマ子が待つているのに」と迫る。「チマ子って彼女が待つているのか?」「妻子が待つているのだ」「一度帰っても再び召集がかかるかも知れん、その時は必ず、ここに来いよ」と念を押して帰郷を許可しました。

兵隊が帰ったので、同期の二人で完全軍装で松山へ帰りました。川上村では復員第一号です。早速、村長が軍力返納命令に基づいて軍刀、拳銃を出してもらいたいと言って来ましたので差し出しました。

その頃、日本では軍隊が無くなり朝鮮戦争が始まり米軍の要請で警察予備隊ができてつありました。

私の所にも警察予備隊の連隊長として処遇するから来てくれんかと招へいがありました。破格の待遇ですからちよつと心が揺れました。民間事業に就職も思うようにいかん時代でしたが、定年後に「つぶし」が利かぬ予備隊では? とも思いましたので、その話は断りました。長男故家業を継がねばならぬので、これも断る理由にしました。

松山に来て見たら全部焦土になって、方向がわからず、ローカル線もやられ、郊外に出て引き返し、荷物を預けていましたが、よくも持ち逃げされませんでした。

私の留守宅は父亡きあと母が家を守ってくれておりました。当時、衣料は切符制で愛媛県織維製品配給会社の統制下にありましたが、業者の子弟を集めて会社を作り、私もこれに勤めました。

原料は軍隊払下げ品を取り扱いましたので業績は好調で、社員に特別ボーナスを出して大変喜ばれました。

戦友のほとんどは戦死しておりますので戦友会はありません。友の冥福を祈る毎日であります。

転属転属の軍隊でしたが幸運に恵まれ、非戦闘地区に転属させられたので現在の私があります。

## 大正生まれの宿命（一）

福岡県 竹下 繁

私は大正十一（一九二二）年十月三十一日、台湾台北市御成町で、原賀家の七男として生を受けました。父は警察官を天職とし、私が六歳頃に定年退職し、その後、煉瓦工場を設立し経営にあたりました。小学校は近所の建成小学校（生徒数千五百人位）に学びました。

五年生に進学しました年に、全国的に活動していた「少年団」に入団しました。規律も厳しくいわば軍隊の「ミニ版」でした。六年生の時、父母が「故郷に錦を飾る」台湾在住の先輩達の慣習に習って、故郷熊本県に帰郷しましたので、私も父母に連れられ熊本市に住むことになりました。住居は、天下の名園で有名な水前寺公園のすぐ傍で、今まで味わい得なかったほどのおいしい水でした。私はこの地で中学校生活を送りました。